倉吉市文化財調査報告書　第92集

郷土資料室

福田寺遺跡発掘調査報告書

（２次調査）

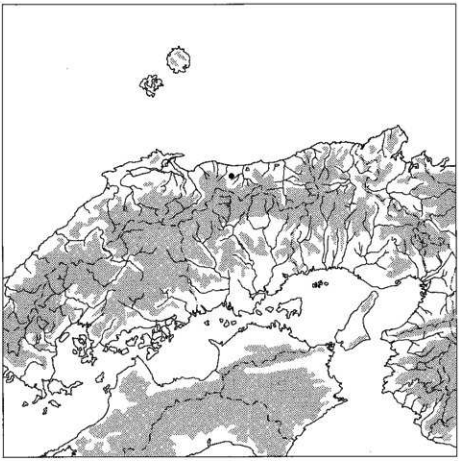
平成9年度

倉吉市教育委員会

0.2
r
)

倉吉市文化財調査報告書　第92集

福田寺遺跡発掘調査報告書



遺跡略号　３ＮＹＦ・２

平成９年度

倉吉市教育委員会

<10>0100572692

序

鳥取県の中央部に位置する倉吉市は、豊かな自然と風土の中で育まれた数多くの原始・古代の優れた埋蔵文化財が存在しており、近年の各種開発事業とともに発掘調査の必要性が高まっています。倉吉市教育委員会では、こうした文化財を地域の先人の貴重な歴史的資料と捉え、開発と文化財の共存をはかるため、文化財行政を進めているところです。

さて、この報告書は、市道横田・久米ケ原線道路改良工事に伴う事前の調査として、平成９年７月に倉吉市横田字福田寺において実施いたしました埋蔵文化財の発掘調査記録です。調査の結果、古墳時代から奈良時代にかけての住居や土壙を発見することができました。

発掘調査の記録といたしましては不十分であり、満足すべきものではありませんが、多くの方々に活用され、郷土の歴史解明の一助となれば幸いに存じます。

最後に、今回の発掘調査にあたりご協力いただきました倉吉市建設課、地元横田地区の方々を始め、関係各位に対し、心から謝意を表する次第であります。

平成10年３月

倉吉市教育委員会
教育長　足　羽　一　昭

例　　言

1．本報告書は平成９年度に倉吉市教育委員会が、市道横田・久米ケ原線道路改良工事に伴う事前調査として、倉吉市横田字福田寺（ふくだじ）において実施した発掘調査の記録である。

2．発掘調査団は次のような組織・編成である。

団　　長	足羽　一昭（倉吉市教育委員会教育長）		
調査委員	名越　　勉（倉吉市文化財保護審議会会長）		
	手嶋　義之（倉吉市文化財保護審議会委員）		
調　査　員	根鈴　輝雄（倉吉博物館学芸員）		箕田　廣幸（文化課課長補佐兼文化財係係長）
	森下　哲哉（文化財係主任）		根鈴智津子（文化財係主事）
	加藤　誠司（文化財係主事）		岡本　智則（文化財係主事）
	岡平　拓也（文化財係主事）		
調査補助員	山根　雅美・松田　恵子		
事　務　局	石田佐喜子（教育次長　９月まで）		新田　征男（教育次長　10月から）
	生田　敦美（文化課課長）		福澤　昌子（文化財係主事）
	山崎慎之介（文化財係主事）		金田　朋子（臨時職員）
内務整理	泉　美智子・世浪由美子・妻藤　君江・松嶋あつ子・竹歳　暁子・山崎有香子		

3．現場での調査は森下が担当した。遺構の図面整理は森下・妻藤が担当した。遺物実測は森下・加藤が担当した。遺物写真は森下・岡平が担当し、松嶋・竹歳・山崎が補佐した。浄書は泉・世浪・妻藤が担当した。

4．本書の執筆は、森下が担当した。編集は松田・世浪が担当した。

5．第１図（地形図）は、建設省国土地理院発行の１：25,000地形図「倉吉」「関金宿」の一部を複製・加筆したものである。第２図は、平成９年度修正測量の１：2,500国土基本図　倉吉市平面図を使用した。

6．挿図中の方位は、特に注記を行わない限り国土座標第Ｖ座標系の北を示す。

7．遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一している。

8．調査によって得られた資料は、倉吉博物館に保管している。

本　文　目　次

Ⅰ　発掘調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 1
Ⅲ　調査の概要 …… 4
　1　遺構 …… 4
　2　遺物 …… 9
Ⅳ　まとめ …… 16
報告書抄録

挿　図　目　次

第1図　倉吉市周辺の地形と遺跡分布図 …… 2
第2図　福田寺遺跡調査区位置図 …… 3
第3図　福田寺遺跡遺構全体図 …… 5
第4図　1号住居・1号土壙遺構図 …… 7
第5図　2号～5号土壙遺構図 …… 8
第6図　1号土壙出土遺物図1 …… 10
第7図　1号土壙出土遺物図2 …… 12
第8図　1号土壙出土遺物図3 …… 14
第9図　2号・3号土壙、P1出土遺物図 …… 15

図　版　目　次

図版1　遺跡　調査区全景　調査後全景　調査区南側
図版2　遺構　1号住居・1号土壙　1号土壙土馬出土状況
図版3　遺構　2号土壙遺物出土状況　2号土壙　3号土壙検出状況　3号土壙
図版4　遺物　土師器・須恵器・瓦質土器
図版5　遺物　土馬・手捏ね土器・土製支脚・竈

Ⅰ　発掘調査に至る経過

福田寺遺跡は、倉吉市教育委員会が、市道横田・久米ケ原線道路改良工事に伴って発掘調査した結果、発見した遺跡である。なお、昭和50年度に倉吉市農業協同組合（当時）西瓜撰果場建設事業に伴う発掘調査として、倉吉市横田字福田寺において福田寺遺跡１次調査を実施しており、今回は２次調査とした。

平成７年６月、倉吉市建設課から、倉吉市横田を起点とした市道横田・久米ケ原線道路改良工事の計画の提示があり、合わせて事業の施工区域に関わる埋蔵文化財の有無の問い合わせがあった。計画は、横田地区から久米中学校沿いに市道福光久米ケ原線までの全長210ｍの区間であり、火山灰台地の久米ケ原丘陵縁辺部を通る市道を改修する計画であった。このため平成７年６月に計画地内の分布踏査を実施したところ、道路に沿った畑で多くの土師器や須恵器片を確認した。さらに遺跡範囲を把握するため平成８年11月25日から11月28日まで国・県の補助を受けて予備調査を実施した。[註] その結果、土師器・須恵器・土師質土器・土製支脚などの遺物が出土し、古墳の周溝と推測できる遺構を検出したことで、遺跡の存在が明らかとなった。

倉吉市教育委員会事務局文化課は、予備調査の結果をもって倉吉市建設課と協議し、道路改修によって削平されるコーナー部分600㎡を発掘調査することとなった。調査は、倉吉市教育委員会事務局文化課が主体となって、平成９年６月23日から平成９年８月７日まで現地調査を実施した。

註　加藤誠司　「19．横田地区（福田寺遺跡）」『倉吉市内遺跡分布調査報告書Ⅱ』　倉吉市教育委員会　1997

Ⅱ　位置と歴史的環境

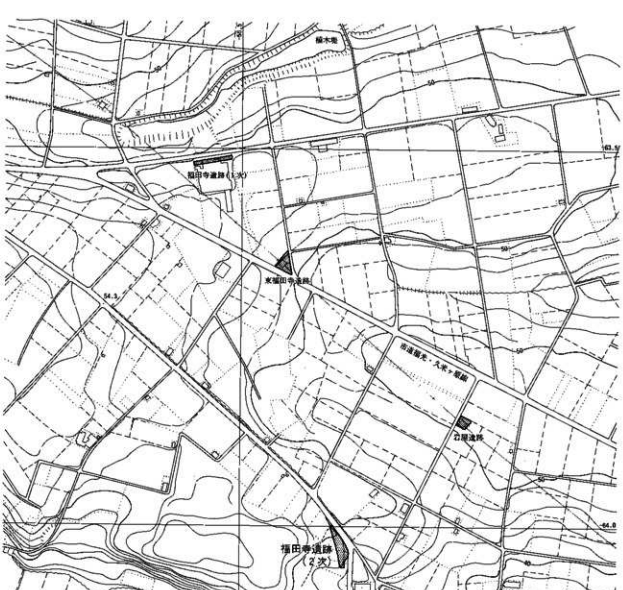
福田寺遺跡は、倉吉市街地の西方に約４㎞離れた倉吉市横田字福田寺に所在し、古墳時代から奈良時代にかけての住居や土壙を検出した遺跡である。そこは天神川の支流国府川の中流域の左岸で、横田集落の北側背後に所在し、久米ケ原丘陵中腹の南側縁辺部にあたる。標高48ｍ付近に位置し、丘陵下の水田面とは15ｍ余りの比高差を有する。この久米ケ原丘陵は、大山（標高1711ｍ）の火山活動によって形成された火山灰台地の洪積性の丘陵で、なだらかな起伏をもって東へ広がりをみせ、倉吉市西郊において水田に落ち込む。このような久米ケ原丘陵上には古くから遺物散布や古墳群など数多くの遺跡が存在することで知られている。福田寺遺跡もそうした中のひとつである。

本遺跡が存在する倉吉市西郊における遺跡の分布状況を久米ケ原丘陵を中心に概観すると、旧石器時代や縄文時代の遺跡は少なく、弥生時代から古墳時代の遺跡が数多く分布する。古墳は、国府川の左岸に前期古墳の国分寺古墳(16)や上神大将塚古墳が存在し、四王寺山周辺や高城山周辺に後期の古墳群が存在する。さらに奈良時代になると伯耆国衙が置かれ伯耆国の中心地となる。中でも集落跡は、生活地としての良好な条件を満たしたこの久米ケ原丘陵に数多く存在する。

弥生時代の集落は、天神川が形成した沖積平野の下流域に長瀬高浜遺跡や松ケ坪遺跡といった前期の集落が存在するが継続せず、中期以降に倉吉市西郊のこの久米ケ原丘陵に多くの遺跡が営まれるようになる。弥生時代中期では福田寺遺跡１次(32)があり、後期では急激にその数が増加し遠藤谷峯遺跡（４）・中峯遺跡（８）・白市遺跡（７）・大沢前遺跡（３）・両長谷遺跡（５）などが存在する。これらの集落は、そのほとんどが古墳時代まで継続するものである。さらに本遺跡の南西、国府川が形成した狭い沖積平野を挟んだ高城地区の高城山山麓には、中期の環濠集落が営まれた後中尾遺跡(36)や後期の後口谷遺跡(35)・箕ケ平遺跡(37)・小谷遺跡などが存在する。ま

第１図　倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

1	昭和開拓遺跡	9	大谷後口谷墳丘墓	17	獅塚遺跡	25	今倉遺跡	33	上野遺跡
2	大道谷遺跡	10	向野遺跡	18	打塚遺跡	26	今倉城跡	34	福本家ノ上遺跡
3	大沢前遺跡	11	大谷城跡	19	古神宮古墓	27	市場城跡	35	後口谷遺跡
4	逢鄙谷峯遺跡	12	大谷大将塚古墳	20	宮ノ下遺跡	28	鳴ノ掛遺跡	36	後中尾遺跡
5	両長谷遺跡	13	小林古墳群	21	伯耆国分尼寺跡	29	矢戸遺跡	37	笑ケ平遺跡
6	古墳群	14	大谷古墳群	22	伯耆国分寺跡	30	岩屋遺跡		
7	白市遺跡	15	中尾遺跡	23	伯耆国衙跡	31	東福田寺遺跡		
8	中峯遺跡	16	国分寺古墳	24	河原毛田遺跡	32	福田寺遺跡（1次）		



第２図　福田寺遺跡調査区位置図

た、集落と関連する墳墓には、高城山裾野に３基の四隅突出型墳丘墓を検出した国指定史跡の阿弥大寺墳丘墓群や、四王寺山南西丘陵に所在する大谷後ロ谷墳丘墓（９）が存在し、集落との関連を物語る。

古墳時代の集落では、弥生時代後期から続く遠藤谷峯遺跡・中峯遺跡・白市遺跡・大沢前遺跡といった集落跡ともに、宮ノ下遺跡(20)・擂塚遺跡(17)・大道谷遺跡(２)・矢戸遺跡(29)などが新たな集落として久米ケ原丘陵に営まれるようになった。そして高城山周辺には、環濠集落が終わった後中尾遺跡や後ロ谷遺跡が所在する。

奈良時代にはいると、久米ケ原丘陵の東端部周辺に伯耆国衙(23)・伯耆国分寺(22)・伯耆国分尼寺(21)とされる法華寺畑遺跡が近接して設けられ、伯耆国の政治・行政・文化の中心地となる。中でも伯耆国分寺は、1969年の道路改良工事に伴って発掘調査が始まり、この後に続く1971～1974年の伯耆国分尼寺跡（法華寺畑遺跡）の調

査、1973～1978年の伯耆国衙跡の調査などの起因となった遺跡である。伯耆国衙跡は、従来伯耆国の総社といわれた国庁真神社の南側に広がる水田に想定されていたが、1969年の伯耆国分寺の発掘調査をきっかけに標高40mの久米ケ原丘陵上に存在することが明らかになった。これまでの調査によって、四方を溝で囲まれた東西273m、南北227mの長方形に区画され、さらに東辺には東西51m、南北149mの張出部が設けられるなど、国衙跡の政庁城など具体的な内容が明らかにされた。さらに1993年には国府川に沿った不入岡地区で、伯耆国の物資収納施設と考えられる東西に長大な大型掘立柱建物群が並列する遺構を伴う不入岡遺跡が発見された。この時期の集落跡には、平ル林遺跡や矢戸遺跡が存在する。中でも矢戸遺跡は福田寺遺跡の東側400m離れた久米ケ原丘陵縁辺部に位置し福田寺遺跡との関連がうかがわれる。

平安時代になると、久米ケ原丘陵の谷を隔てた北側の四王寺山山頂に、四天王像を祀る四王寺が建立された。鎌倉時代から室町時代の遺跡は、城跡以外はあまり知られていないが、集落跡として14～15世紀代に営まれた今倉遺跡(25)が知られているだけである。

Ⅲ　調査の概要

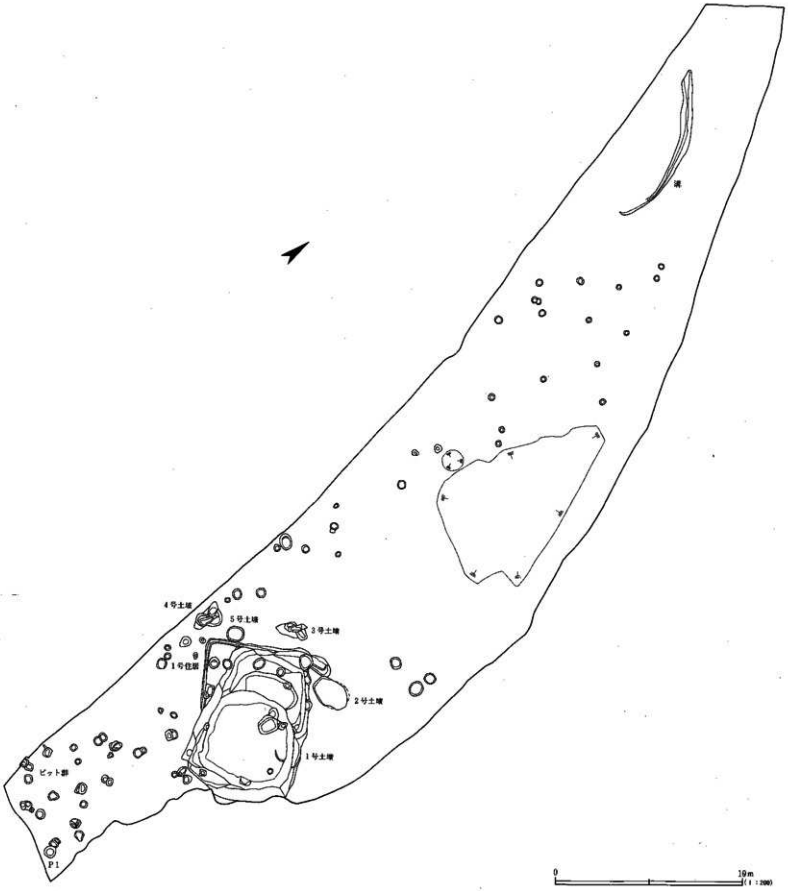
発掘調査は、市道横田・久米ケ原線の道路改良工事に伴うものであり、予備調査の結果から久米ケ原丘陵縁辺部の道路範囲部分という限られた面積を調査した。発掘調査面積は600㎡であった。調査は、表土を除去し黒色土層を掘り下げて遺構検出作業を行った。調査区内の基本層序は上層から、Ⅰ表土（耕作土）・Ⅱ黒色土・Ⅲ暗茶褐色土（漸移層）であった。遺構の検出はⅢ暗茶褐色土上面で行ったが、最終的には黄褐色砂質土（上のホーキ火山砂層）面で検出した。

調査の結果、竪穴式住居１棟、土壙５基、溝１条、そしてピット群を検出した。

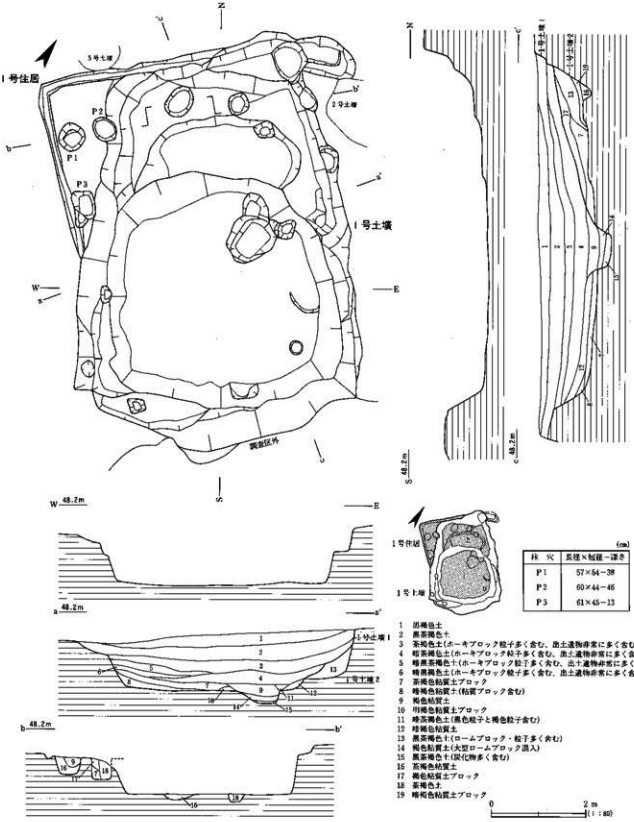
1　遺構

１号住居　調査区の南側、標高48m付近に所在する。１号土壙によって大きく削平を受け、住居西側の１隅を残すだけの状況で検出した。平面形は、遺存する辺から推測し方形を呈すると判断する。住居の規模は、遺存状況が非常に悪く計測不能である。しかし南西辺に所在するＰ３を壁際中央ピットと判断し、遺存する辺を折り返すことによってその長さを住居の南辺とすれば、１辺の長さ約5.5mと推測でき、約30㎡の床面積の住居であったものと考えられる。壁高は既に削平され計測不可能であった。周壁溝は遺存する北西辺と南西辺に一部残る溝から幅16～22cm、深さ５cm前後で巡るものと考えられる。住居に伴うピットはＰ１～Ｐ３の３個である。この内Ｐ２は主柱穴の可能性があり、Ｐ３は壁際中央ピットの可能性が考えられる。住居に伴う遺物は確認できなかった。

１号土壙　調査区の南側の標高48m付近に所在し、１号住居の北東側に重なるように位置する。検出面での規模は東西8.46m、南北5.84mを測り、平面形は東辺が約6.0m・西側辺4.2mを測るやや変形した台形状を呈する。検出した当初は一つの土壙と判断していたが、調査が進むにつれ、底面の高低差や土層観察の結果から、新旧関係のある土壙２基が重なり合って存在すると判断し、上層の土壙を１、下層を２とした。深さは１が1.2m、２が1.0mを測る。１の底面は東西4.12m・南北4.06mの不整形な方形を呈し、２は、東側一部分を１に削られるものの、東西3.6m・南北3.8mを測る台形状の底面を有するものであった。土壙内部の堆積状況はほぼ自然堆積状を呈している。遺物は、第３層の茶褐色土層から第６層の暗黒褐色土層にかけて非常に多く出土した。また１の北隅の底面に位置する土壙の埋土には炭化物が多く含まれていた。

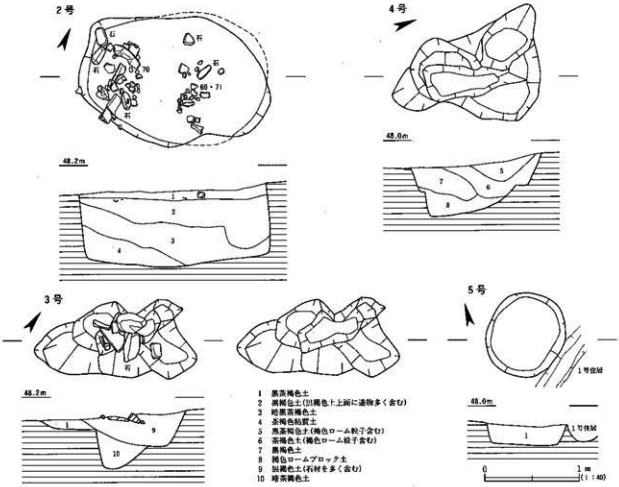


第３図　福田寺遺跡遺構全体図



柱 穴	長径×短径－深さ (cm)
P1	57×54－38
P2	60×44－46
P3	61×45－13

第4図　1号住居・1号土壙遺構図



第５図　２号～５号土壙遺構図

２号土壙　１号土壙の北側約１ｍに隣接する。平面形は、やや角ばるものの楕円形を呈しており、規模は東西1.9ｍ、南北1.4ｍを測り、深さは中央部で0.8ｍを測る。底面は、北東側で壁がえぐれるものの検出面と同じ楕円形を呈する。遺物は、第２層黒褐色土上面に非常に多く平面的に集中して出土した。

３号土壙　１号土壙の北西約２ｍに所在する。平面形は非常に歪な長楕円形を呈する。土壙の規模は上面で東西1.60ｍ・南北0.78ｍを測り、深さは中央で0.55ｍである。底面は非常に凸凹しており、小さな土壙が重なり合うように掘られたような状況を示す。遺構検出面で土壙中央から石材がかたまって出土し、埋土中から土器片がわずかに出土した。

４号土壙　１号住居の西側約３ｍに所在する。平面形は非常に歪な形をした三角形を呈する。規模は上面で東西1.2ｍ・南北1.5ｍを測り、深さは南側で0.5ｍである。平面的にはやはり３号土壙のように小さな土壙が重なり合うように掘られた状況を示す。遺物は出土しなかった。

５号土壙　１号住居の西側辺に接するように所在する。平面形はやや角張る楕円形を呈する。規模は南北0.9ｍ・東西0.8ｍを測り、深さは中心部で0.2ｍであった。遺物は出土しなかった。

溝　調査区北側に所在する。幅１ｍ前後で長さ約17ｍを検出した。緩やかに弓弧状をなし、非常に浅く深い北側端でも10cm前後を測るだけで、耕作による削平が大きく及んでいるものと思われる。遺物は出土しなかった。

ピット群　調査区北側と、１号土壙の南側に集中する。径1.0～0.5ｍ前後で、深さ0.8ｍ前後のものが多い。これらの調査区内で検出したピットは、柵列や掘立柱建物などのまとまりは確認できなかった。ほとんどのピットからは出土遺物は確認できなかったが、Ｐ１から若干の須恵器の出土があった。

2　遺物

福田寺遺跡２次調査において出土した遺物には土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・手捏ね土器・土馬・土製品がある。この内、多く出土したのは土器類で、その大半を占めるのが土師器であり、須恵器がそれに次ぐ。遺物は、１号土壙－１で大半が出土し、わずかに２号土壙と３号土壙からの出土が見られる。

以下、遺構別にその概要を述べる。なお、器種の分類や調整技法、そして時代区分については『伯耆国庁概報（第５・６次）』及び『平城宮発掘調査報告Ⅶ』に原則的にしたがっている。土師器の坏や皿等の調整には、口縁部をヨコナデし、底部外面未調整のもの（ａ手法）と、底部外面をヘラケズリ調整するもの（ｂ手法）とがある。またナデについては、回転運動を利用するナデをヨコナデとして区別し、利用しないナデを単にナデないし仕上げナデとして表記した。さらにロクロを使用したナデをロクロナデとして区別する。

１号土壙

土師器坏Ａ・坏Ｃ・鉢・皿Ａ・高坏・甕、須恵器坏Ａ・坏Ｂ・坏Ｇ・坏Ｈ・高坏・脚付埦・長頸壺・甕、瓦質土器の坏Ｂ、そして手捏ね土器・土馬・竈・土製支脚が出土した。

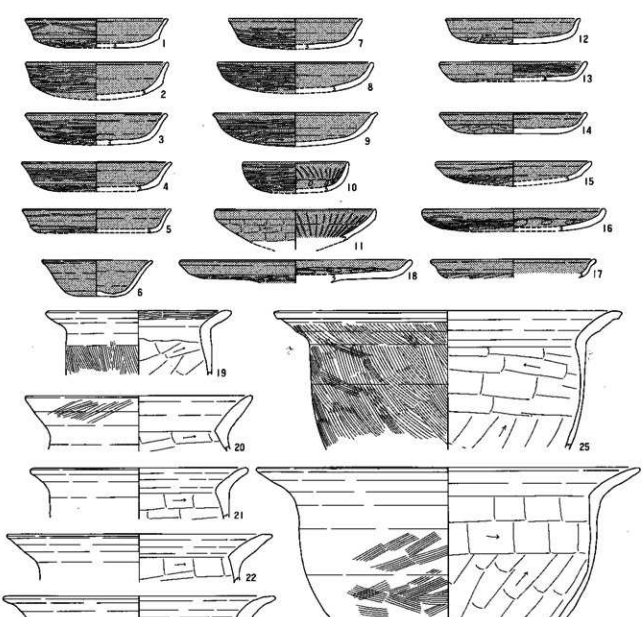
土師器（第６図）　１号土壙で出土した土師器坏・皿・鉢の一群の特徴は、回転台成形ではなく、底部外面をヘラケズリ調整する。また赤色顔料の彩色もムラなくやや厚く塗られ、刷毛塗りの痕跡は目立たない。器面は内外面ともヘラミガキを施し、内面はさらに丁寧にナデ調整し、螺旋状の暗文を施す例が多い。さらにこの時期の坏や皿の口縁部形態には、下半が内湾し上半が僅かに外反するものと、口縁部全体に内湾するものとが認められる。これらの土器はいわゆる伯耆国庁の第１段階・西方官衙出土の一群の土器よりさらに古い一群を構成する。

坏Ａ（１～６）　坏Ａには明らかに時期の異なる二つの型式が存在する。一つは底部外面をｂ手法で調整し、すべて外面にヘラミガキを施し螺旋状の暗文をもつものもある（１～５）。もう一つは底部外面をａ手法、口径10cm前後で外方に大きく開く口縁部と狭い底部からなるものである（６）。この内前者の土器は、口径が14.8～15.6cm内におさまり、器高が2.6～3.8cmにおさまる。口縁部の形態から外傾度の数字の小さいもの（１・２）と数字の大きいもの（３～５）に分類が可能で、これが口縁部形態の違いを反映するものと思われる。いずれも丁寧な赤色顔料の彩色が施される。６の土器は極端に外傾度の数字が大きくなり、赤色顔料も薄く刷毛塗りの痕跡も残る。これらの違いは時間的な違いを表しているものと判断する。

坏Ｃ（７～９）　１号土壙出土の土師器のなかでもっとも特徴的な器種の一群。『平城宮発掘調査報告Ⅶ』に記載される坏Ｃにあたる。小さな平底ないし丸底と斜め上に開く口縁部からなる。口縁部端面が内傾するものである。器高が低く、底部が丸みをもち、皿Ａと区別が難しい器形を呈する。全ての坏は回転台成形ではなく、底部外面をｂ手法で調整し、外面にヘラミガキを施し暗文をもつものもある。彩色は、ムラなく厚く施され、刷毛塗りの痕跡は目立たない。口径は14.1～17.0cmを測り、器高は3.3～3.6cmを測る。

鉢（10・11）　内湾気味に立ち上る口縁部が端部で内傾するものと、底部は平底に近い丸底で口縁部との境は不明瞭で内湾気味に外傾し、口縁部端部で内湾するものがある。いずれも回転台成形ではなく、底部外面をヘラケズリし、さらにヘラミガキを施す。内面には、丁寧なナデ調整後放射状や螺旋状の暗文を施す。彩色は、ムラなく厚く施され、刷毛塗りの痕跡は目立たない。口径は10が11.0cm、11が16.8cmを測り、器高は4.6cmと3.3cmである。

皿Ａ（12～17）　口径17cm以上のもの（16・17）と15cm前後のもの（12～15）がある。また口縁部の形態から、口縁部が「く」の字状に外反するもの（12・14・17）と、短い口縁部が内湾気味に外傾するもの（13・15・16）とがある。底部外面はすべてｂ手法で調整し、外面にヘラミガキを施すものもある。内面はヘラミガキを残すもの（13）と、ヘラミガキの上に丁寧なナデ調整を施すもの（12・14・15・17）がある。16は底部内面に螺旋状暗文を施す。



第6図　1号土壙出土遺物図1

内外面丁寧な彩色が厚く施され、刷毛塗りの痕跡は目立たない。口径は14.0～18.8cm、器高は2.2～2.7cmを測る。

高坏（18）　復元径約24.5cmを測る坏部の破片である。底部外面は皿Aと同じくb手法で調整し、ヘラミガキを施す。口縁部は内湾気味に外傾する。内面は三重の螺旋状暗文を施す。内外面丁寧な彩色が厚く施され、刷毛塗りの痕跡は目立たない。脚部その他については不明。

甕（19～27）　外傾する口縁部と半円形の胴部からなる甕。体部の残りが悪く、全体の形を復元できるものは少なかったが、口径によって、30cm以上のもの(25～27)と、20～30cmのもの(20～24)、そして20cm以下のもの(19)の3つに分類できた。また口縁部の形態には若干の違いが認められるものの、概ね「く」の字状に外反する口縁

部からなる。胴部外面は、器形の大小を問わず概ね横から斜めのハケメ調整を施す。胴部内面は、頸部直下からヘラケズリを施す。大型の甕25は、緩やかに外反する口縁部中程で肥厚し、端部は尖り、断面形が三角形を呈する。中型の甕24は、緩やかに外反する口縁部は端部で肥厚し、外側に膨らみをもつ。口縁部内面にハケメ調整を施す。

須恵器（第７図）　１号土壙出土の須恵器は、一括資料とするにはやや幅があるものの、古墳時代後期後半的な土器様相から、律令的な土器様式へと変化する時期のものと判断できる。すなわち坏H（38）と坏G（28～30・39・40）の共伴関係や、あるいは坏Gと坏A（41～46）・坏B（31～37・47～49）の共伴関係がそれを物語るものといえる。またこれらの須恵器は、焼成・色調・質によって、高温で焼かれ青灰色を呈する硬い質のものと、耐火度が低く青～淡灰色を呈するやや硬いものからやや軟質のものとがある。

坏G蓋（28～30）　いずれも小型で、縁端部内面にかえりをもつ。かえりには、高さが縁端面より高いもの、同じものがある。頂部には偏平な擬宝珠や宝珠に似た乳頭状のつまみをつける。縁部をロクロナデ、頂部をヘラケズリし、内面天上部には仕上げナデを施す。口径7.2～8.4cm、器高2.5cm前後を測る。

坏B蓋（31～37）　蓋の形態から、縁端部内面にかえりをもつもの（31～33）と、かえりのないもの（34～37）がある。かえりのないものには、平らな頂部に屈曲する縁部からなるもの（35・36）と、頂部がまるく曲線的に縁端部にいたるもの（34・37）がある。さらに縁端部が、垂直に垂下がるもの（36・37）と、縁端部で鋭り断面三角形を呈するもの（34・35）がある。頂部には偏平な宝珠形のつまみや環状つまみをもつものがある。縁部をロクロナデ、頂部をヘラケズリし、内面天上部には仕上げナデを施す。口径11.1～16.4cm、器高3.0cm前後を測る。36は、転用硯の可能性がある。

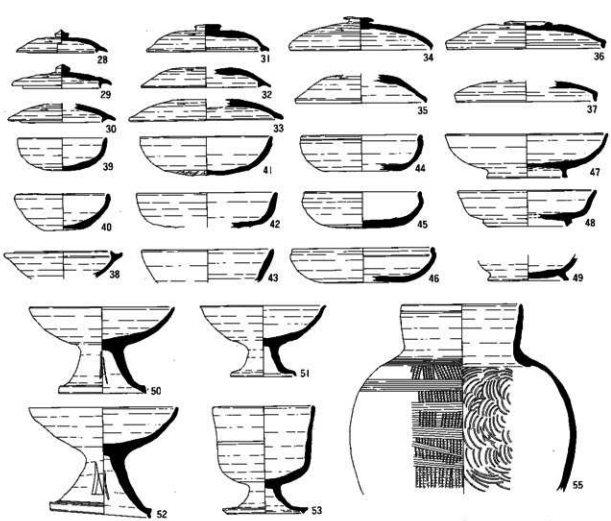
坏H（38）　立ち上がりは矮小で、受部はやや厚く上外方へのびる。底部を欠くが平底と思われる。内面の立ち上がりと体部の境界に一条のヘラ描き沈線が施される。口縁部内外面ヨコナデ調整し、外面底部ヘラケズリ調整を施す。口径約10.0cm。

坏G（39・40）　坏G蓋に対応する受部のない平底の坏身。口径10cm内外の小型のもので、底部をヘラケズリするもの（39）とヘラ切り未調整のもの（40）とがある。口縁部は内湾気味に外傾し、丸くおさめる。口径9.2cm・9.6cm、器高3.5cm・3.9cmを測る。

坏A（41～46）　平坦な底部と斜め上にのびる口縁部からなる。口縁部の形態から内湾して立ち上がり直線的に口縁部にいたるもの（41～43）と、体部は内湾気味に立ち上がり口縁部近くでくびれて肩をつくり、口縁端部は外反し丸くおさめるもの（44～46）とがある。底部外面は、口縁部形態の前者は、ヘラ切り手法を用い未調整のものとヘラケズリを施すものがある。後者では回転糸切り手法や静止糸切り手法を用いる。口径は14.6～12.2cmを測り、器高は4.1～3.5cmである。これらの坏Aは、いずれも焼成温度が低く青～淡灰色のものが多い。

坏B（47～49）　坏Aに高台を付けた形態をそなえ、坏B蓋と組になるもの。坏Bも坏Aと同じように口縁部の形態で体部が内湾気味に立ち上がり、高台は外方に張り出すもの（47・49）と、体部が直線的に立ち上がり、高台は低く体部と底部の境のやや内側につくもの（48）がある。口径16.9～14.5cmを測り、脚径は約8.5cm前後、器高は4.7～3.8cmを測る。いずれも高温で焼かれる青灰色を呈し硬い質のものが多い。

高坏（50～52）　短脚の高坏で脚部に透しのあるものと無いものがある。坏部は底部から口縁部にかけてやや内湾気味に緩やかに開く。脚部はラッパ状に開き、端部はゆるやかな屈曲を有し上下に拡張するものもある。脚柱部には二方向の透しのあるものも有るが、形式化しており、線状の透しなども存在する（50）。口径15.5～13.1cm、脚径10.4～7.0cm、器高11.4～7.5cmを測る。大部分が焼成温度が低く、青～淡灰色を呈し、やや硬いものから軟質気味なものまで存在する。



第７図　１号土壙出土遺物図２

脚付埦（53）　ゆるやかな底部に上外方にほぼ垂直気味に立ち上がる口縁部の埦部と、短く大きくラッパ状に外方に開く脚部からなる。体部中央には１条の凹線が巡る。高温で焼かれ、青灰色を呈した硬い質のものである。口径10.4cm、脚径7.9cm、器高11.4cmを測る。

長頸壺（54）　高台を有する長頸壺の底部。倒卵形の体部に、平坦な底部を有する。体部と底部の境に大きく外方に張る断面三角形の高台を付ける。脚径12.4cmを測る。

甕（55）　わずかに内湾気味に垂直に立ち上がる口縁部と球形に近い胴部からなる。底部は欠損する。口縁部内外面ヨコナデ調整し、端部下に１条の凹線を施す。胴部外面は格子目のタタキを施しカキメを施す。内面は同心円文タタキを施す。口径12.4cmを測る。

瓦質土器（56）　須恵器坏Bと同じ形態を呈する。比較的大型で、坏底部から口縁部にいたるまで内湾気味になだらかに上外方へ開き、口縁端部は内傾し、面を有する。高台は外方へ張り出し、端部で横方向へ拡張し面を有する。口縁部内外面ヨコナデし、内面底部仕上げナデを施す。淡青灰色を呈し、やや軟質状の焼成である。口径19.4cm、器高5.4cmを測る。

土製支脚（第８図、57・58）　中空厚手の土製支脚。斜め上方に２本の把手がのびて、先端が短く尖る。頂部の把手の間にやや歪な円形の孔を有する。頂部付近はタタキを施しナデ調整を施す。脚下半部は大きく外側に開きヨコナデ調整を施す。内面は、上から下方向へのヘラケズリで最下段は横方向のヘラケズリを施す。57はほぼ完形で、58は先端部分約1/2を欠く。57は把手を含まない高さ15.1cm、脚径は15.8cmを測る。58は16.7cm、15.7cmを測る。

土馬（第８図、59～63）　59は１号土壙の北東隅付近の遺構検出面から約50cm下の茶褐色土中から出土した。土馬の頭部部分。前面に鼻孔・口・目をそれぞれ表現し、目の上方に面繋と思われる凹線を２条施す。頭部には引手の表現と考えられる凹線気味の線がある。遺存部で全長6.7cm、幅4.8cmを測る。61は１号土壙の南東側、暗黒茶褐色土中から出土した。土馬の胴部から尻にかけての部分で後左足が一部残る。胴部上面に鞍の後輪の一部と思われる粘土の盛り上がりがあり、飾り馬の破片と考えられる。遺存する土馬の表面には赤色顔料が残り赤色塗彩された土馬と思われる。指オサエとナデによる成形と調整が施される。遺存部で幅4.1cm、高さ6.2cmを測る。60・62・63は１号土壙の暗黒茶褐色土中から出土した。いずれも剝離や欠損があり全容は不明である。60は棒状で剝離痕跡が４ヵ所あり、土馬の胴部と考えられる。色調は黒灰色を呈し、長さは遺存部で7.6cm、幅3.0cmを測る。62・63は同一個体と考えられる。長さ４cm前後の片方に剝離痕跡を有し、反対側に磨耗痕跡が認められるものであり、土馬などの足部分ではなかろうか。

手捏ね土器（第８図、64～68）　１号土壙の暗黒茶褐色土中から出土した。小片も含め50数点出土したが図化できたのは５点だけであった。形態の違いから底部が尖底のもの（64）・平底のもの（65～68）に分類できる。口縁部は指オサエとナデにより調整し成形する。大きさは口径が4.3～8.0cm、器高が4.3～5.6cmを測る。

鉄鏃（第８図、Ｆ１・Ｆ２）　１号土壙の南西部分の暗黒茶褐色土中から出土した。いわゆる方頭鏃に分類されるものである。錆などにより鏃身の一部と頸部を欠く。大きさはＦ１が長さ6.4cm、最大幅2.6cm、Ｆ２が長さ6.9cm、最大幅2.6cmを測る。断面形は錆で丸く見えるものの切刃造りを呈する。

２号土壙（第９図）

土師器坏Ａ・皿Ａ・甕、竈、須恵器坏Ａが出土し、その大部分が甕と竈片であった。

土師器甕（69・70）　外傾する口縁部と円形の胴部からなる甕。体部の残りが悪く、全体の形を復元できるものは少ない。何れも口径30cm以上のものであり、概ね「く」の字状に外反する口縁部からなり、端部で平坦面をもつ。胴部外面は、横から斜めのハケメ調整を施す。胴部内面は、頸部直下からヘラケズリを施す。口径は69が35.0cm・70が40.1cmを測る。

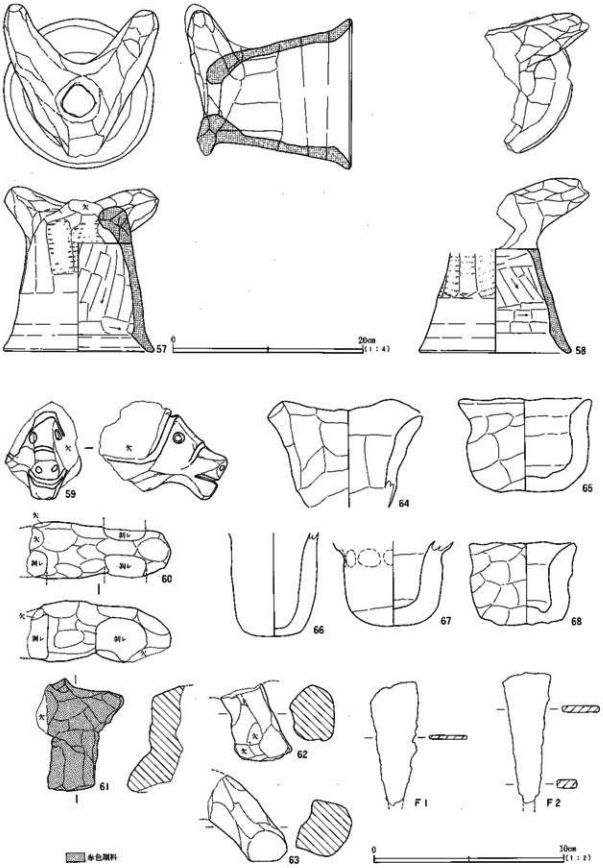
竈（71）　破片による出土で、図上復元である。造りは非常に精悍で、体部下部付近は６mmと非常に薄く作られている。上部がすぼまった台形状を呈し、焚口外縁部に鍔状の庇が巡る。庇は45度前後の角度で立ち上がる。体部は外面丁寧なハケメ調整を施し、内面は体部上位が右上方向、中位が横方向、下位が左上方向のヘラケズリが施される。底部幅56cm・上部幅32cm、器高45cmを測る。

須恵器坏Ａ（72）　体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部近くでくびれて肩をつくり、端部は外反して丸くおさめる。底部外面は回転糸切り技法を施す。口径12.8cm、器高3.4cmを測る。

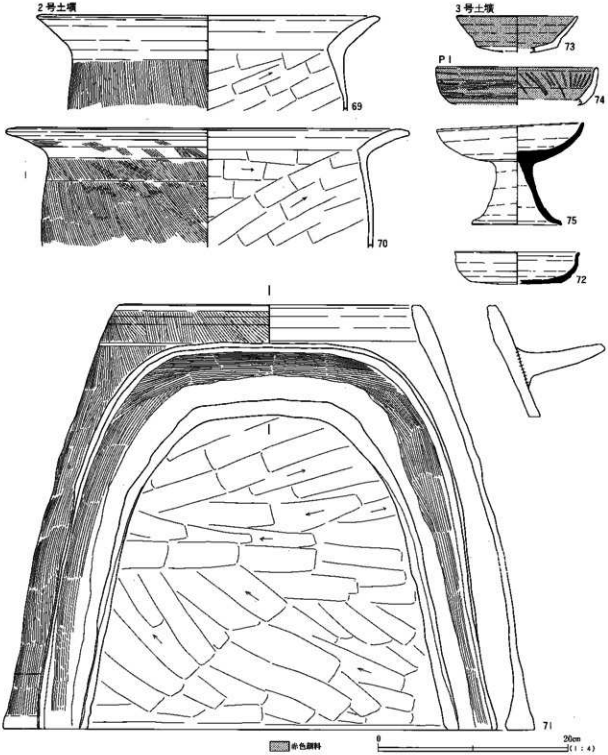
３号土壙（第９図）

土師器坏Ａ、須恵器の高坏が出土した。図化できたのは土師器だけであった。

土師器坏Ａ（73）　底部外面はａ手法、上外方に大きく開く口縁部と狭い底部からなる。外傾度の数字は大きく、赤色顔料の塗彩は薄く、その痕跡を残すだけである。口径12.5cm、器高4.0cmを測る。



第8図　1号土壙出土遺物図3



第9図　2号・3号土壙、P1出土遺物図

P1（第9図）

土師器鉢、須恵器高坏が出土した。高坏は坏部が少し欠けた状態で出土した。

土師器鉢（74）　内湾気味に上方に立ち上がる口縁部で、端部は内傾する。底部外面はb手法で調整し、口縁部外面をヘラミガキする。内面はヘラミガキの後丁寧なヨコナデを施し、放射状の暗文を施す。口径16.6cm、器高4.0cm前後を測る。

須恵器高坏（75）　短脚の高坏で脚部の透しは無い。坏部は底部から口縁部にかけてやや内湾気味に緩やかに開く。脚部はラッパ状に開き、端部はゆるやかに屈曲する。焼成温度が高く、自然釉がかかり焼き歪みを持つ。口径15.4cm、脚径9.2cm、器高10.5cmを測る。

Ⅳ　まとめ

今回の調査では、古墳時代から奈良時代にかけての集落の一部分を検出した。調査の範囲が道路予定地内という限定された部分であり、また検出した遺構も少なく、遺構の面的かつ構造的な広がりを追求できない調査であった。しかし検出した1号土壙埋土から比較的多くの出土遺物が見られ、中でも奈良時代の土師器と須恵器はまとった量が出土した。ここでは1号土壙出土の土師器と須恵器の内、坏・坏蓋・皿・椀を中心に若干の検討を行いまとめとする。

土師器

土師器は坏A・坏C・鉢・皿A・高坏・甕・竈であり、このうち坏A・坏C・鉢・皿Aが大半を占める。前章でも述べたように坏・皿の成形後に行う調整技法には、①口縁部をヨコナデし、底部外面未調整のもの（a手法）と底部外面をヘラケズリ調整するもの（b手法）とがある。また②ヘラミガキや暗文の有無による区別が可能である。さらに③口縁部形態により、口縁部の下半が内湾し上半がわずかに外反するものと口縁部全体が内湾するものが認められる。

この判断基準で坏・皿を概観すると、坏Aには明らかに形態の異なる二つの形式が存在することがわかる。その一つは、回転台による成形ではなく、底部をb手法(ヘラケズリ調整)、内面はさらに丁寧なナデ調整を施すものである。全面に赤色顔料の彩色がムラなくやや厚く塗られ、外面にヘラミガキを施し、内面には暗文を施す例が多い。さらにこの一群には、坏Cと呼ばれる小さな底部ないし丸底を有し、斜め上に開く口縁部からなる坏の存在が認められる。しかし一群と捉えたこの土器群には、口縁部の形態の違いや口縁部外面のヘラミガキの有無、あるいは暗文を持つものと持たないものが存在し、古い要素と新しい要素が混在しており細分の可能性が伺える。坏Aのもう一方は、口縁部をヨコナデし底部外面はa手法、口径10cm前後で外方に大きく開く口縁部と狭い底部からなるものであった。

このように土師器には二つの形態の違う土器が存在し、この形態の違いは明らかに時間的な差を物語っている。この事からこれらの土師器は大きく2時期に分類が可能である。ここでは前者を土師器Ⅰ類と呼び、後者を土師器Ⅱ類と呼ぶことにする。

倉吉地方の奈良時代の土師器は、巽淳一郎氏によって伯耆国衙出土の土師器をもって伯耆国庁編年が検討されている。[註1)] これによると、8世紀後半から10世紀代の土師器の変遷が大きく3段階に分類される。第1段階は西方官衙出土の1群の土器をいい、ロクロ技術採用以前の土器でb手法による調整を用いたものである。中にはヘラミガキを施す例も多く暗文を施すものもある。なお、この第1段階の土器は細分の余地があると述べ、時期は8世紀後半に比定される。第2段階は、底部ヘラ切り技法を伴う回転台成形の土器であり、数様式に分類できるものである。この様式の細分は、遺物を出土した遺構の切り合い関係からその遺構名をとってＳＤ37→ＳＤ33→ＳＫ05→ＳＤ35→ＳＤ38の5様式の変遷が考えられており、時期はＳＤ37が8世紀末、ＳＤ33が9世紀後半、ＳＫ05が9世紀後半にそれぞれ比定される。第3段階は、ロクロ成形土師器である。小型化の傾向が著しく、赤色顔料の塗彩が見られなくなる。時期は10世紀前半代に比定される。

福田寺遺跡の土師器Ⅰ類を国庁編年で当てはめると、回転台による成形ではなく、底部をb手法（ヘラケズリ

調整)、内面はさらに丁寧なナデ調整を施す点で、伯耆国庁第1段階に比定できるものも存在する (10・74)。しかし、口縁部外面にヘラミガキを施し、内面には暗文を施す例が多い点や、伯耆国庁第1段階にない坏Cと呼ばれる小さな底部ないし丸底と斜め上に開く口縁部からなる坏の存在は、伯耆国庁編年の第1段階よりもさらに古い要素を持ちあわせている。そしてこの坏Cは、平城宮の報告によると「飛鳥Ⅰ」以来の器種であり、少なくとも「平城宮Ⅲ」までは継続するとされ、「平城宮Ⅳ」に至って坏A類に同化されるものといわれるものである。[註2)] これらの年代は「平城宮Ⅲ」が8世紀前半で、「平城宮Ⅳ」が8世紀後半に比定される。このことから福田寺遺跡土師器Ⅰ類は、伯耆国庁編年の第1段階より古く、坏Cの存在する時期ということとなり、「平城宮Ⅲ」に比定できるものと判断し8世紀前半頃の土器と推定する。さらに木簡の出土で時期設定される出雲国庁編年によると、[註3)] 土師器Ⅰ類の口縁部外面のヘラミガキと底部ヘラケズリの調整技法は出雲国庁編年の第2形式A類に類似しており、この年代が8世紀前半に比定される。こうした状況からも、土師器Ⅰ類は8世紀前半に比定できるともものといえる。

もう一方の福田寺遺跡土師器Ⅱ類は、口縁部をヨコナデし底部外面をa手法、口径10cm前後で外方に大きく開く口縁部と狭い底部からなる坏Aに代表される。特に坏・皿底部のヘラ切りは底部周縁にとどまり、底部は丸味を持つ不安定な形となる。この形態から伯耆国庁編年の第2段階に比定でき、その中のSK05土器に相通するところから、9世紀後半代に比定できるものと思われる。

須恵器

須恵器には坏A・坏B・坏G・坏H・高坏・脚付埦・甕・長頸壺などがある。この内、時間的推移をもっと普遍的に理解できるものとして坏と蓋のみみると、前章でもふれた坏Hと坏G、そして坏A・坏Bの存在が須恵器の時期を端的に物語っているものといえる。

坏H (38) は口径10cm前後の矮小な立ち上がりを有するもので、外面をヨコナデとヘラケズリする。つくりが比較的しっかりする。この坏Hに伴う蓋は確認できなかった。坏G (39・40) は口径9cm前後の小型のもので、垂直気味に立ち上がる口縁部と平坦な底部からなる。坏Gには坏G蓋が存在し(28~30)、内面の口縁部端部にかえりを有するもので蓋頂部に乳頭状 (29) もしくは宝珠形 (28) のつまみを伴う。坏A (41~46) は、口縁部の形態と底部の調整技法によって二つの種類に分類ができる。前者は内湾しながら直線的に立ち上がる口縁部とヘラ切り調整による坏Aであり、後者が内湾しながら立ち上がり端部でくびれて肩をつくる口縁部と底部を糸切り調整を施すものである。坏B (47~49) は、口縁部が内湾して立ち上がり高台が外方に踏ん張るものと、口縁部が直線的に立ち上がり高台が低く垂直気味に付くものとがある。また坏Bには坏B蓋が存在し(31~37)、頂部を平らに削り偏平な宝珠状のつまみを有し内面にかえりを有するものと、蓋頂部に環状のつまみを有し内面にかえりの無いものとがある。この結果、須恵器は、少量ではあるが坏Hの存在と小型化した坏Gの共伴する時期と、坏Aの底部糸切り調整法の時期に当てはまるものとに分けることができる。ここでは前者を須恵器Ⅰ類と呼び、後者を須恵器Ⅱ類と呼ぶことにする。

この時期の山陰地方における須恵器の編年は、出雲国衙出土の須恵器による出雲国庁編年や柳浦俊一氏の編年試論があり、[註4)] また米子市の陰田遺跡出土の須恵器を森本勝氏・佐古和枝氏が検討した陰田編年がある。[註5)] 中でも出雲国庁編年の須恵器の流れは、蓋のかえりの変化に着目し7世紀後半から9世紀初頭までを5形式に区分されている。こうした編年を基準に福田寺遺跡出土の須恵器を概観すると、須恵器Ⅰ類は、坏Hの存在と坏Gに見られる器形の小型化の傾向や、坏G蓋のつまみの形態、そして坏B蓋のかえりの変化などから出雲国庁編年の第1形式や、陰田編年の「陰田－8」に比定できるものである。ただ畿内を中心とした都城の土器様相の中では、坏Hの存続がほぼ「飛鳥Ⅱ」の新しい段階の7世紀中頃までとされその違いをみせるものの、陰田遺跡での検討の結

果坏Ⅱの存続が山陰地方においては7世紀後葉の「陰田－8」にまで残存するとされるところとは符合する。また須恵器Ⅱ類は、坏Aの底部糸切り技法を中心に坏B蓋のかえりの変化から柳浦編年の第3式から第4式に比定でき、出雲国衙では第3形式から第4形式に当てはまる。このⅡ類はやや年代幅を持つものと考えられる。こうした状況から福田寺遺跡の須恵器Ⅰ類は7世紀後葉頃に比定でき、須恵器Ⅱ類は8世紀代にかけてのものと判断する。

この結果、福田寺遺跡出土の土師器Ⅰ類が8世紀前半に、土師器Ⅱ類が9世紀後半にそれぞれ比定することができた。また須恵器ではⅠ類が7世紀後葉に、Ⅱ類が8世紀代にそれぞれ比定できた。年代的にはやや須恵器が先行するものの、出土する遺物の量から土師器Ⅰ類や須恵器Ⅱ類の時期に当る8世紀前半頃が遺跡の中心的な時期ではなかったのだろうか。なお、1号土壙を含む福田寺遺跡の集落については、限られた範囲の調査であり言及できなかった。しかし、福田寺遺跡から東40mの久米ケ原丘陵南斜面には、今回出土した土師器や須恵器などの遺物を始め土馬や手捏ね土器といった福田寺遺跡と同じ遺物構成を持つ矢戸遺跡[註6]が所在する。同じ久米ケ原丘陵の南斜面に隣接して位置し、同じ遺物構成を持つということから、福田寺遺跡に類似した集落の可能性が考えられる。

以上、福田寺遺跡発掘調査の概要を述べた。検出遺構が少なく報告の大半が出土遺物の概観であったが、伯耆国庁編年の第1段階より古い土師器を確認することができた。しかし非常に少ない遺物から時期決定を行っており、多くの問題点を残すこととなった。今後は新たなる資料を待ってこの時期の編年の確立を期待する。

註

1　金子裕之・巽淳一郎他　『伯耆国庁跡発掘調査概報（第5・6次）』　倉吉市教育委員会　1979

2　奈良国立文化財研究所編　『平城宮発掘調査報告Ⅷ』（奈良国立文化財研究所学報第26冊）　1976

3　近藤　正・町田　章他　『出雲国庁跡発掘調査概報』　松江市教育委員会　1970

4　榊浦俊一　「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』第3号　松江考古学談話会　1980

5　萩本　勝・佐古和枝　「第Ⅳ章遺物について　第4節：須恵器について」『陰田－一般国道9号米子バイパス改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』　米子市教育委員会・建設省中国地方建設局倉吉工事事務所　1984

6　手嶋義之・佐々木謙他『横田・矢戸遺跡発掘調査概報』（久米ヶ原土地改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告）　鳥取県教育委員会　1971

参考文献

佐藤興治・須藤　隆　『伯耆国庁跡発掘調査概報（第3次）』　倉吉市教育委員会　1976

菅原正明他　『伯耆国庁跡発掘調査概報（第4次）』　倉吉市教育委員会　1977

奈良国立文化財研究所編　『平城宮発掘調査報告Ⅱ』（奈良国立文化財研究所学報第15冊）　1962

『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』（奈良国立文化財研究所学報第31冊）　1978

『平城宮発掘調査報告Ⅺ』（奈良国立文化財研究所三十周年記念学報第40冊）　1982

小森俊寛　「概要」『古代の土器1　都城の土器集成』　古代の土器研究会　1992

「基調報告」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東5　7世紀の土器－』古代の土器研究会第5回シンポジウム　古代の土器研究会　1997

巽淳一郎　「古代窯業生産の展開－西日本を中心にして－」『文化財論叢』　奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会　1983

田辺昭三　「須恵器大成」　角川書店　1981

根鈴智津子他　『郊家平古墳群発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1988

図版 1

調査前全景

(北東から)

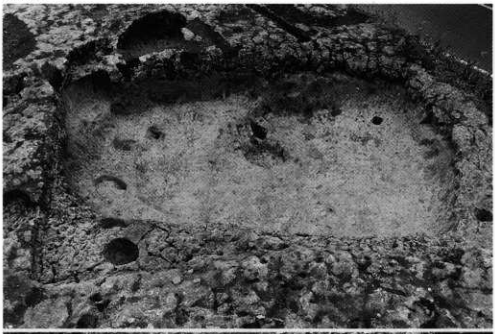
調査後全景

(北東から)

調査区南側

(北から)

図版 2



1号住居
1号土壙
(南西から)

(北東から)

1号土壙土馬出土状況
(西から)

2 号土壙遺物出土状況

（東から）

2 号土壙

（東から）

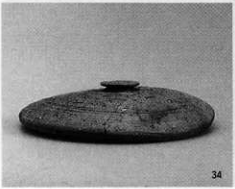
3 号土壙検出状況（北西から）

3 号土壙（北東から）

1

9

3


34

52

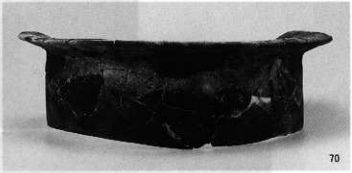
75

47

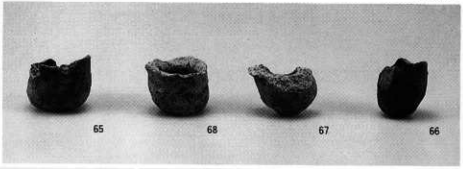
56

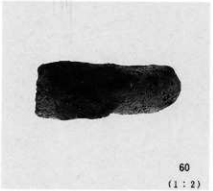
53

69


70

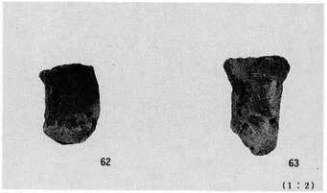
59
(1：2)


65　68　67　66


60
(1：2)

61
(1：2)

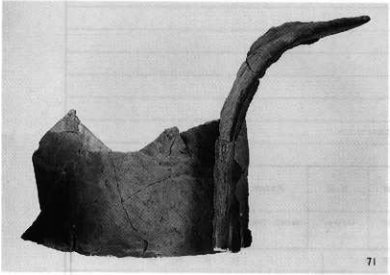
61
(1：2)

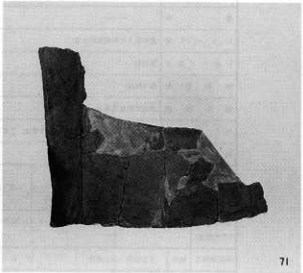

62　63
(1：2)

71

57

58


71


71

210.2
Kur
(92)
図書館

報告書抄録

書名	福田寺遺跡発掘調査報告書（２次調査）
副書名	——
巻次	——
シリーズ名	倉吉市文化財調査報告書
シリーズ書号	第92集
編著者名	森下哲俊
編集機関	倉吉市教育委員会
所在地	〒682-8611　鳥取県倉吉市宮川722番地　ＴＥＬ0858-22-4419
発行年月日	西暦1998年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村：遺跡略号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
福田寺遺跡（２次調査）	倉吉市横田字福田寺	31203：３ＮＹＦ・２	35°25'17"	133°46'44"	19970623～19970807	660	市道横田・久米ヶ原線道路改良工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代：主な遺構	主な遺物	特記事項
福田寺遺跡	集落	古墳：竪穴式住居　１棟 土墳　５基 溝　１条	土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器 子持ね土器・土馬・土製支脚	古墳時代終末から奈良時代の集落跡の一部。土師器より土師器・須恵器以外に鞴・土製支脚・子持ね土器・土馬など多くの遺物が出土した。

福田寺遺跡発掘調査報告書
（２次調査）

平成10年３月31日　印刷
平成10年３月31日　発行

編集
発行　倉吉市教育委員会

印刷
製本　山本印刷株式会社